

あなたはどちらの国に生きるのか？失われた者IV

「生死感あなたは生きている？」ヨハネ 11:4,14-21,25-27

■ 家に迷い込んだ蛇

とある家に蛇が迷い込み、それを見た夫人は大騒ぎで主人を呼びます。主人は棒を持ってソファの下で探します。バタバタしている主人を見て、今度は犬が自分と遊んでもらえると勘違いして、主人のところに寄ってきました。犬の濡れた鼻が主人の足にチョンと当たっただけでしたが、主人は蛇にかまれたと勘違いして、「痛い！」と大騒ぎで気絶してしまいます。それを見た夫人は毒蛇だと思い込み、救急隊を呼びました。救急隊はストレッチャーで主人を運ぼうとしていたのですが、急に出てきた蛇に驚いて、主人を落とし、主人は腕が曲がるほど骨折してしまいました。夫人はそれを見てまた大騒ぎ…。そんな中、蛇は静かに家を出ていきました。

蛇はたまたま家に迷い込んで、冷静に出ていっただけですが、周りは勘違いの連続で大騒ぎになってしまいました。私たちは、ほんの小さな勘違いから、大きな影響を受けることになってしまうのです

■ 神様は良い道を用意してください

道を歩く男性が札束を落とす実験の動画を見ました。動画の中では、歩いている男性が札束を落とし、目の前でそれを見た人は男性に告げることもなく拾って黙っていました。

札束の場合「私は本人に教える」と思う人が多いでしょうが、他の場合ではどうでしょう。私たちは本当に願っていることができているでしょうか。私たちの心には良心があり、99%はやるべきことが分かっているはずですが、小さな誘惑の声によって怒りが生まれ、その怒りが本当にすべき行動に影響を与えてしまいます。神様は私たちに、心で信じたことを行うことを願ってくださっています。最初から最後までをご存じな神様は全体を見て、最後にはその人が正しい判断ができるように願ってくださっています。だから私たちは、一時のことに右往左往してはいけません。

■ ラザロの病氣と死

今回の聖書箇所は、ラザロが病氣にかかったシーンです。ラザロが死んだと聞いて、トマスは「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」と言います。トマスは死に興味があり、「この人と一緒にならもう死んでもいい」と思っていたのですが、神さまがいう本当の「死」というものが分かっていなかったのです。

『この病氣は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです』(ヨハネ 11:4) 「栄光」カーヴオード

『さてヤコブはラバンの息子たちが、「ヤコブはわれわれの父の物をみな取った。父の物でこのすべての富をものにしたのだ」と言っているのを聞いた。』(創 31:1)

ヤコブは妻をもらうために、叔父のラバンのもとで理不尽の中、長く働くことになりました。そのような理不尽を通った後、ヤコブは栄えました。理不尽なラバンを通してヤコブに祝福があるならば、私たちが愛してやまない天の父が私たちに祝福を与えてくれないはずがありません。

私たちは「死」というものに興味を持っています。この「死」は悪魔が与えた罪からくる実なのです。神様はその「死」について期限を設けず、私たちはそれを知らなくていいと決められました。知らないからこそ、正しく行うように、自由意思を与えてくださったのです。

神様は「死」と思えるようなものを通して、必ず栄光を見させてくださいます。苦しみや悲しみの中にあるときこそ、「主に委ねます」といえるかどうかで、私たちの人生は変わってきます。

■ ベタニヤ

「ベタニヤ」家、国

『あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。しかし、彼らの仕えるその国民を、私がさばき、その後、彼らは多くの財産をもって、そこから出てくるようになる。』(創 15:13-14)

ベタニヤとはイチジクの町=イスラエル=苦しめられる=失われた民ということ。ユダヤ人は神様から選ばれた民でしたが、「死(罪)」を恐れて生きていました。神様はその「死」という概念を捨てるように、その死は「死」だけで終わるのではないという事を伝えてくださっています。イエス様は、エルサレムから 3 キロ離れたこのベタニヤに行き来していたのには意味があり、失われた民を探しておられたのです。この失われた民は私たちそのものなのです。

■ マルタとマリヤ

『イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。』(ヨハネ 11:5)

マルタ マル 苦し、激しい、苦み、苦しみ

マル マーラル 苦しめる、激しく泣く

マルタとマリヤは「苦しみと貧しさの町(ベタニヤ)に住んでいる激しく泣く女」という意味がある。

『エサウは父のことばを聞くと、大声で泣き叫び、ひどく痛み悲しんで父に言った。「私を、お父さん、私も祝福してください。』(創 27:34)

エサウは長子の権利を軽視し、弟に譲ってしまい、素晴らしい恵みを得る

ことができませんでした。そして本来自分のものであったものを失ったことに気づき、「私も」と泣いて言ったのです。私たちにもそのようなことはないでしょうか。神様から任されたものを適当に扱っていないでしょうか。そして文句を言ったりしていないでしょうか。

マルタとマリヤは同じ「悲しみに激しく泣く女」でしたが、マルタはイエス様を迎えに行き、マリヤは座っていました。マルタは悲しみがゆえに、待つことができず、「私の兄弟は死ななかったでしょうに」と文句を言ってしまったのです。マリヤはどのように悲しみをイエス様に伝えたのでしょうか。イエス様はそのあと「もしあなたが信じるなら…」とされています。私たちは、今置かれている場所に意味があると信じているならば、態度を変えなければなりません。私たちにすでに、「死」では終わらない、恵みに富んだ良い道が用意されています。

■ ラザロ (エルアザル)

エル 神と アーザル 助ける⇒神は助ける、主は我が助け

『ヨセフは実を結ぶ若枝、泉のほとりの実を結ぶ若枝、その枝は垣を超える。弓を射る者は彼を激しく攻め、彼を射て、悩ました。しかし彼の弓はたるむことなく、彼の腕はすばやい。これはヤコブの全能者の手により、それはイスラエルの岩なる牧者による。あなたを助けようとするあなたの父の神により、また、あなたを祝福しようとする全能者によって。その祝福は上よりの天の祝福、下に横たわる大いなる水の祝福、乳房と胎の祝福。』(創 49:22-25)

「ラザロ」とは、ヨセフが飢饉や苦難の中で、神の祝福をもって自分の民族を救ったように、「死」のように、もう終わってしまったと思われるようなことを通して祝福をもたらす約束であるということです。ヨセフが助かったように、神様は必ず苦難の中から助けてくださいます。その方法は、トマスのように死についてくことではなく、死を恐れていた人が、死をも恐れずに神様と共にその道を進めることです。

■ 信じてついていく

『イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。私を信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。』彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。』(ヨハネ 11:25-26)

死にさいなまれて生きようになった私たちは、比較・劣等感から安心を求めてしまいます。そして神様を失い、自分を失ってしまいます。神様は、そのような恐れから解放されて、自由にされた生き方を与えたいと願ってくださっています。神様は私たちが救う計画を立ててくださっています。愚痴や不満を言う人生を辞めて自由になりたいと思うならば、アブラハムのように、神様に心を向け、感謝して喜んでいくことを選ぶ決断をします。そのとき神様の栄光があらわされます。

■ 峯野龍弘牧師

彼の父はアル中で暴力をふるう人でした。子どもができるまで妾にしていた女性に育てさせました。彼は自分の人生が無意味に思え、父親のことを何度も殺そうと思っていました。父親が亡くなると、自分が母親の本当の子どもではないことを知りました。彼は自分の存在意義が分からなくなっていました。そんな彼がイエス様と出会い、牧師になり多くの人を導くリーダーとなりました。イエス様は、無意味だと思っていた彼の人生に対して、今存在している意味があることを教えていただきました。トマスと同じように、「死」を見ていた彼に、「永遠のいのち」を見えるようにさせていただきました。

■ お祈り

神様。私にたくさん恵みに富んだ良い道を用意して下さっているのに、小さな誘惑で道からそれてしまう弱さがあります。そして、あなたが与えて下さっているものを軽視し、今の状況に不満を言い、不安がゆえに安心を求めてしまう弱さもあります。今日もう一度、違うものに心が奪われているなら捨て去る決断をします。神様、死を死で終わらせない神様の計画を信じたいです。自分の人生を変えたいです。そして、本当の自分を探したいです。あなたに心を向け、苦難の中にあるように感じるとき、感謝を口にし、喜ぶことができますように。

(要約者:神達 良子)

(2023年9月3日)